

南大萱の地域史～文化との関わりを中心として

吉川 義一（社会人コース）

はじめに

南大萱は、琵琶湖の南部に位置する丘陵地である。4k m²の狭い特殊な南大萱地域は、京都・奈良にも近く東西南北を結ぶ交通の要衝でもあり、渡来人が土着し優れた大陸文化が花開いた地域である。本報告では、この地域の歴史の変遷を調べることで、人間の営みが地域をいかに作り変えていったのかを考えてみたい。

1) 南大萱の歴史・大萱の変化

南大萱地区は、湖面0位の地域から100Mの丘陵地もある。滋賀県各地には、渡来人の持つ鉄鉾・窯業遺跡があるが、またこの地区も同様である。ここでは5・6・7・8世紀時代より農耕社会が連綿として継続し条里田が置かれた。卑弥呼が大陸政権より送られたとされる100枚中の一枚の三角縁神獸鏡も発掘されている。壬申の乱の時代には、大友皇子、大海人皇子の戦乱、平城京や後の平安京に近く勢田川を挟む戦乱の場であった。聖武天皇が置いた屯倉も置かれ琵琶湖を背景に近江国衙の遺跡がある。江戸期の元禄頃より紙に残る記録が多く残されているが、それによれば、琵琶湖がありながら沿岸部以外逆水が出来ず農耕に必要な水の確保に苦勞し「溜池」に頼ったことがわかる。明治元年（1867）頃までは遅遅として土地の開発は進まなかった。

2) 社会構造の変化 製造業から流通業と瀬田駅の開業

江戸元禄農耕地は、70町歩あったが明治期200町歩の増加を見た。しかし現在では農耕地130町歩は住宅地に変貌した。それにつれ、人口も昭和20年（'45）に1200人（250戸）程度であったが、昭和44年（'69年）瀬田駅開業により急激に増え現在では2万人を超える。農家の一戸当たりの耕地面積は、平均5反歩程度に減少したが、大都市周辺のため、かなり地価は上昇した。明治大正は人口が少ない無医村であったが、現在では医療施設は事欠かない。もともと、南大萱地域は大都市近郊にあり行商も盛んであり裕福であった。又琵琶湖を背景とした工業用水を求め、日本有数の工場が立地し、その従業員の受け皿になった。農家のほとんどは、必然的に会社勤めの兼業農家になった。また地域の商店は、郊外型の大型スーパーやショッピングモールに駆逐されていった。

3) 地域の文化

この地区では、江戸期に200戸（1200人）足らずの人口で、真宗や浄土宗の「五ヶ寺」を保持していた。しかし、最近では長寿社会を迎えて、寺社の経営は厳しい。人口増加により、小学校は一校であったものが四校に分割された。一体感のあった旧住民の持つ文化と・新住民の持つ雑多な文化との軋轢も顕在化している。行事などの役員要請等にも協力が得られずギクシャクしている。今のところ、旧住民の運営能力が勝り、彼らが地域の仕事では要所を握っている。しかし新住民の増加で旧住民の単一の文化は揺らいでいる。両者はやがて混合し、新しい地域文化が形成されるであろう。

おわりに

南大萱は、元々は農村であった。しかし、戦後に工場が立地することで、そこで働く労働者の住宅地へと変貌を遂げた。そして、近年では、駅や郊外型の大型店舗ができることで、再び変貌してきている。この過程は、農業→工業→流通・サービス業という、日本社会の産業構造の変化の縮図をみるかのようである。しかし、全国には農業が行きづまると同時に衰退した地域も多い。なぜ南大萱は、そうならなかったのか。南大萱は、農業地としては、歴史は古かったが、あまり優れた特徴をもたなかった。しかし、工業地としては水資源に恵まれ、流通・サービス業地としては、大都市近郊という条件に恵まれた。それが、変貌、発展の要因だったと言えるであろう。